



ヘンダーソンビル 留学日記



桂高校では、昨年の8月から12月までの5カ月間、姉妹都市である米国テネシー州ヘンダーソンビル市にある国際姉妹校、ビーチ高校に長期留学生2名を派遣しました。

そのお二人の感想を紹介します。

短い旅を終えて

小川匡仁

今から8カ月以上も前、桂高校の代表として長期留学生に選ばれた時、とても嬉しかったことを今でもはっきり憶えています。その後、実際に留学するまでには、期待と不安が入り混じった時期を過ごしていたこともあり、渡米してホスト・ファミリーに会った時には、何故かとても安心しました。



その日から、私のアメリカでの5カ月間の高校生活が始まりました。アメリカの高校に通学するとすぐに、次のような日米の違いに気づきました。アメリカでは、中学校と高等学校の6年間を連続してハイスクールと言っています。また、生徒の中には、自分で車を運転して通学する人も多くいました。この様な、

アメリカの高校生たちには当たり前前にも、新鮮な驚きを感じ、その度に『ついにアメリカにやって来たぞ!』と心の中で吹き、密かに渡米の感動を噛みしめたものです。

テネシー州ヘンダーソンビル市での高校生活は、美しく、そして楽しい思い出として私の心の中にいつまでも残るものです。何よりも嬉しかったことは、ホスト・ファミリーが、私を家族の一員として扱ってくれたことです。夏にはカヌーに乗り込んで行ってもらい、3時間ほど楽しく川下りを楽しみました。秋には、ホスト・ファミリーに、お孫さんが生まれ、フロリダ州マイアミまで車で片道15時間かけて孫の顔を見に行くのに、私も連れて行っていただきました。

教会に行くことも日常の習慣になりました。モルモン教などの信仰熱心な人たちとも親しくなりました。最初、教会は、堅苦しくてつまらない所だと思っていましたが見学するにつれて、楽しく明るい所であることが分かりました。教会の庭には、バスケット・コートまであり、パーティーやダンス・パーティーに参加して楽しく過ごすことも、たびたびありました。朝早く起き教会で勉強してから学校

に行くのが日課になりました。

冬になると、最大のイベントであるクリスマスがやって来ました。それと同時に別れの時も近づいて来ました。クリスマス・イブには、ツリーの下にプレゼントが置かれ、美味しいものを沢山食べました。クリスマス当日には、プレゼントを沢山もらい、夢のように楽しい一日を過ごしました。



クリスマスから数日後に、とうとう私の帰国の日がやって来ました。帰国の日の前夜、私の頭の中には、5カ月間の楽しかった思い出が次々に浮かんで来ました。せっかくな知り合い、共に学び、語り合ったクラスメイトたち、私を家族の一員として受け入れてくれた家族、その他多くの人達と別れなければならぬこと

が、本当に辛かったです。別れの辛さを感じると共に、この別れは永遠のものではないという気持ちが、心に浮かんで来ました。さらに、その気持ちは、『この思い出の地に必ず戻って来よう!』という決意に変わって行きました。

帰国の日の早朝、私は、別れの際に、辛い気持ちがかみ上げてきて、何も話せなくなるだろうと思い、予めホスト・ファミリーの一人ひとりに宛てて手紙を書きました。別れの際には、やはり予想したとおり、暖かいものがこみ上げてきて、私の大切な人たちを見るのが出来なくなっていました。それで、手紙を一人ひとりに渡しました。それぞれの手紙の最後には、私の決意を同じ言葉で書きました。

『また、必ず帰って来ますと。』私は、この長期留学に行くことが出来たことを心から感謝しています。両親が、留学するようにと、私の背中を押してくれたからこそ、私の夢は実現しました。また、多くの人たちの励ましがあったからこそ、有意義な日々を過ごせたと思っています。この留学に對して指導くださいました先生方、支援していただいた都留市の皆さん。本当にありがとうございました。